

現代の歌物語を書く

白瀬浩司

(初出誌 Ⅱ 『研究紀要』 第32号、大谷中学・高等学校、一九九五年十一月)

## 現代の歌物語を書く

白瀬 浩司

一

鎌田敏夫の短篇小説『会いたい』の時間は、三十歳過ぎの主人公・浩一の現在の恋と過去の二つの恋（大学時代の恋、高校時代の恋）をめぐる物語として流れている。ここでは、決して同じ時を共有しえないはずの三つの恋が、沢田知可子の歌う『会いたい』という曲を媒介として、一つに紡ぎ合わされていく。

浩一の現在の恋人である真弓は、ボストンの大学への二年間の留学を希望し、二ヶ月前に渡米したばかりだった。浩一は、恋仲になって間もない時期に自分から遠く離れていった彼女に不信感を抱く。自分のことを愛していないのではないかと。その不信感はおそらく浩一自身も気付いていないのだが、六年前、大学時代の恋人・恭子の前から（彼女の二度目の妊娠中絶を契機に）自分が逃げ出してしまったことに根ざしていた。あるいは、さらに遡って、十五年前、高校時代の恋人・美知子をつき合いはじめてすぐ交通事故で失ってしまったという彼の心の傷に

根ざしていたとも言える。

真弓からの電話を待ちわびる浩一の留守電に、沢田知可子の『会いたい』という曲のワンフレーズが、二日続けて吹き込まれていた。彼はそれを真弓からの「会いたい」というメッセージだと思ひ込み、普段はつきりものを言う彼女らしからぬやり方に胸を熱くする。しかし、週末の電話で真弓に冷たく否定され、浩一は彼女への不信感をいっそう強めてしまう。『会いたい』の電話はその後も何度か続き、浩一は意を決して恭子のもとに確認の電話を入れるが、例の電話の主は彼女でもなかった。恭子は浩一と別れた二年後に別の男と結婚し、既に子供も生まれていた。浩一は恭子に示唆され、『会いたい』の歌の文句が美知子との思い出と重なり合うことに気付いていく。「誰かが、昔のことを、おれに思い出させようとしているんだらうか？」——例の電話の主が真弓でも恭子でもないとするれば、浩一に思い当たるのは、もはや美知子しかいなかった。

『会いたい』を契機として自身の過去の恋に向き合っていく中で、不信感の欠片かけらもなく相手をまっすぐに見つめることの出来た高校時代の自分を、やがて浩一は取り戻していくことになる。それは、高校時代の恋によって受けた心の傷や大学時代の恋への罪悪感が、恭子による、

「私は、何度もあなたに会いたいと思ったわ。会いたい、会いたいって、日に何度も思ったこともある。でも、私とあなたのことは、この歌みたいにきれいなものじゃないもの」／「おれのこと恨んでるだろ？」／「別れたいときはね。でも、今となっては、いい思い出」／（中略）／「幸せなのか、今？」／「ええ」／「そうか」という赦ゆるしとともに、癒なぐさされていく過程でもあった。付言するならば、浩一ばかりでなく、恭子もそうであったが、さらには真弓もまた、

「私、あの曲を何度も何度も聞いてたのよ、ボストンで。あなたに会いたい、会いたいって思いながら」と、『会いたい』という曲を媒介として、自身の「会いたい」気持ちに向き合っていくのである。かくて、「両方の

気持ちがしっくりしない」まま真弓と離ればなれになった浩一ではあったが、彼を心配して突如帰国した真弓と「しっくりとしたくちづけ」を交わし、物語は幕切れを迎える<sup>①</sup>。

鎌田敏夫『会いたい』は、『野性時代』（角川書店）一九九四年二月号に発表後、角川ホラー文庫『見知らぬ私』（一九九四年七月）に収載されている。この小説を教材として取り上げたのは同年の九月、高一普通科・国語Ⅰ「現代文」（三単位）の授業においてであった。いま、『会いたい』の授業の全容をあげておくならば、担当二クラス（四組・男子45名、五組・男子44名）とも、概ね、次の通りである。

第一時限目Ⅱ初発感想（五十字）、プリント（1）の読解。

第二～七時限目Ⅱプリント（2）～（9）の読解。

第八時限目Ⅱプリント（10）の読解、感想文（三百字）。

第九時限目Ⅱ読解のまとめ。歌物語に関する説明、構想メモ用紙および下書用紙配布（自分の好きな歌を自由に選び、その歌詞を次時限に用意）。

第十時限目Ⅱ「歌物語」下書作業（清書は次時限に提出）。

なお、この小説の読解にかかわる第一時限目から第九時限目の授業展開については別稿<sup>②</sup>に譲ることとし、本稿では、『会いたい』読解後の第九時限目から第十時限目の取り組みについてまとめておきたいと思う。

## 二

第九時限目。『会いたい』の読解のまとめを終える頃には、既にこの時限も過半以上が過ぎていた。手早く（現

代の「歌物語」を書こう!」と題したプリントを配布し、以後の取り組みについて生徒たちに説明していった。プリントの内容は次のようになっていた。

▼鎌田敏夫の『会いたい』は、沢田知可子の『会いたい』という歌をテーマとして紡ぎ出された小説だった。

▼実を言うと、こういう物語の作り方は、決して新しいものではない。なんと、みんなが知っている古典『伊勢物語』なんかも、その一つ一つの物語の多くは作品中に織り込まれた歌をめぐるものとして作られているんだ。

▼ここで、少しカタイ話をおこう。例えば、みんなの古典編の教科書に載っている大伴家持の歌は、次のようになっていた。

三年春正月一日、因幡国の序にして、饗を国郡の司等に賜ふ宴の歌一首

新しき年のはじめの初春の今日降る雪のいや重け吉事

▼傍線を引いた部分を歌の「詞書」と言う。詞書ってというのは、歌の詠まれた事情や対象などを書き記したものだ。この部分が長くなって物語化されたのが、「歌物語」と呼ばれる作品であると考えてもらってもいいと思う（かなり大ざっぱな説明ではあるけど）。▼さて、そこで、今回のキミたちの取り組むべき課題だが、自分の好きな歌を一曲選んで、その歌をめぐる物語を書いてもらおうということなんだ。次の授業までに、自分の選んだ歌の歌詞をコピーまたは書き写してくること。その際に、作詞者・作曲者もチェックしておく（例えば、『会いたい』ならば、「作詞〓沢ちひろ、作曲〓財津和夫、編曲〓芳野藤丸」となっている）。▼作品の字数は七百字以上千二百字以内とする。短い物語なので、鎌田敏夫『会いたい』のように歌詞を文中に引用することはせずに書いてほしい。▼物語の題名は、歌の題を取って、例えば『さよなら人類（たま）』というかたちにし、カッコ内には歌手の名前を入れることにする。

このプリントのほか、生徒たちの手もとには〈現代の「歌物語」を書く！／構想メモ〉、〈現代の「歌物語」を書く！／下書用紙〉と題した二種類のプリントがわたっている。前者の内容は、

- (1) 選んだ歌
- (2) 歌手
- (3) 作詞者・作曲者・編曲者
- (4) 歌詞（コピーを貼り付けるか、書き写すこと）
- (5) 登場人物（だれが、だれと）
- (6) 場面（いつ、どこで）
- (7) 事件（何をして、何が起きて）
- (8) 結末（どうなった）

というもので、後者は原稿用紙である。生徒たちは、既に一学期後半の段階で「羅生門」の続編を書くという取り組みを<sup>⑧</sup>こなしてきている。とはいえ、それは三百字のものであったから、今回は七百字以上ということで分量的には倍を越える、いわば前回の取り組みの応用編でもある。

第十時限目。最終時限を迎えた教室は始業のチャイムを聞いてもまだ騒然としていたが、それはこれから取り組む作業に向けての騒ぎである。きちんと歌詞の書き写しあるいはコピーの貼付をしてきた者、他の生徒からコピーのお裾分けにあずかっている者、自分の記憶の中から何とか歌詞を掘り起こそうとしている者、お互いの選曲を確認し合っている者など……。

私はまず一人一人が歌詞を用意できているかどうかチェックした上で、構想メモの作成と下書に入るよう指示した。「歌物語」の構想を相談し合う者、人の構想メモをのぞき込んで難癖をつけている者、早々に下書に取り組ん

で自身の会心作(？)の冒頭部分を周囲に読み聞かせている者……、騒然とした雰囲気は相変わらず続いたが、時限の半ばを過ぎる頃にはそれもやや落ち着き、多くの生徒が自分の下書用紙に向き合っていく。もちろん、生徒たちの作業に遅速の差があることは言うまでもない。時限の終わる頃には早くも清書にとりかかる者のある一方で、まだ構想をまとめあぐねている者もある。とりあえず、時限終了五分前の段階で、〈現代の「歌物語」を書く！／清書用紙〉と題した原稿用紙を全員の手許に行きわたらせ、次の時限に清書を提出してもらおうことを伝えた。

生徒たちの〈現代の「歌物語」〉で最も多かったのは、男女の恋愛を題材としたものである。彼らの作品群がテレビドラマや漫画や小説などにみられるような、所謂「物語の定型」に掬い取られてしまっていることを指摘し、それをステレオ・タイプと断ずることはたやすい。また、指定字数の問題もあるうが、全般に気分的・雰囲氣的なものに流れている点も否定しがたい。しかし、それでもなお、彼らが書くことを楽しんでる姿や、それを楽しむ中で彼らの表現が前回よりも徐々にではあれ、確かなものとなってきていることを看過したくないと私は思う<sup>④</sup>。次に、彼らの手になる〈現代の「歌物語」〉のいくつかを掲出する。

二二

④ 思いきり笑って (DEEN) 克泰・B

家に帰ってきた浩一郎は今日届いた写真を見ていた。

浩一郎は、写真を撮るのが好きである。しかし、一度たりとも賞をもらったことがなかった。今回もコンクールのしめきり日が近いにもかかわらず全くよい写真が撮れないでいた。



そんな浩一郎にもマラソン選手である恋人の真美がいた。真美は浩一郎と違い、毎回よい成績を残していた。真美の方は試合が近かったので、よくランニングをしていた。浩一郎もよくつきそった。ランニングの最中に真美は言った。

「写真の方は大丈夫なの？」

「だ、大丈夫」

といかにも大丈夫ではないと言っているような返事。しかし、浩一郎は真美に心配をかけまいと思って言っているのだ。真美もちろんわかっていたが、真美はとても心配そうだった。

浩一郎のめざす写真は輝いているものを撮ることである。そんな写真を求めて毎日、写真を撮りにいったが、よい写真は撮れない。彼は毎日をきゅうくつに感じていた。ただおやみによくはない写真を撮っている毎日を。

そんな時、真美から電話がかかってきた。

「明日の試合、見に来てよね」

「あっ、う、うん」

浩一郎は真美の試合のことをすっかり忘れていた。

「忘れてたの？」

「ち、違うよ。覚えてるよ」

と、この後五分ほど話した。浩一郎は写真のことは半分あきらめていた。

マラソンが始まった。真美は優勝候補だけあって三十キロ地点から独走体勢にはいった。

浩一郎は最初テレビで見えていたが、今はゴール地点で真美の到着を待っている。待つこと三十分、真美がゴール地点へ来た。

真美が大勢の人々に拍手されながらゴールへ近づいてくる。浩一郎の目には、そんな真美の姿が輝いて見えた。思わず浩一郎はカメラのシャッターを切った。浩一郎は初めて輝いているものを撮った。そんな気がした。そして、その写真に『思いきり笑って』という題をつけて送った。

今日、その結果が届いた。浩一郎と真美は息をのんで結果を見た。二人の顔が変わった。笑顔にだ。今まさに二人は浩一郎の求めていた輝いているものになっている。

② CONFESS ION (T M N) 英生・Y

本宮直人は今、空港にいる。たった今ロンドンから帰って来たところである。今回の旅は決して遊びにいったわけではない。彼の三枚目となるアルバムを作るために、わざわざロンドンまでレコーディングをしにいったのである。彼は近頃日本でも知られるようになってきたミュージシャンの一人である。直人は空港に着くと、しばらくあたりを見回してそして大きくため息をついた。美保の姿が見えない。美保とは直人が高校時代からつきあっている女性である。彼女は直人がロンドンへ出発する前の日に突然、「日本にいつ帰って来るの。」と書いてきた。いつもの彼女なら絶対言わない言葉である。そもそも、レコーディングとは予定した期間より長びくものであったので直人はその言葉にとても驚いた。

ロンドンに着いて一度だけ彼女に電話をかけた。あの時電話をしなければ良かった。直人の今回のレコーディング中の唯一の失敗であった。長い期間外国にいたため、外国嫌いの直人は少しいらだっていた。声を聞くうと思っただけだったのに、ついカッとなって美保に怒鳴ってしまったのである。

出発してからずっと自分を迎える美保の姿を想像していた直人には思ってもみない自分の失敗に腹が立っていた。

直人は今、自分のマンションへ向けて車を走らせている。時刻は六時一〇分を少しまわったとこだ。六時半すぎに自分のマンションについた。車から降りた直人はゆっくりと自分の家に向かって歩きだした。歩きながら直人は美保に自分が悪かったと電話をしようと思ったが自分がそういうことが苦手なのを知っていたため、違う方法を探すことにした。

エレベーターに乗り「6」のボタンを押した。エレベーターが六階につくと、直人はとても驚いた。なんと部屋の前に美保がいたのである。部屋の前に美保がいるなんて直人の頭の中では予定外のことであった。直人がそんなことを考えていると美保の方が直人に近づいて来た。直人は自分にあせりながらも大きく息を吸った。「怒鳴って、ごめん」

美保はその言葉をきくと少しうれしそうに微笑みながら、「おかえり。」

と言った。直人はその言葉を聞くと、今まで緊張していた顔をゆるめた。

© いつかきつと……(DEEN) 大志・K

いつもの様に、朝がやってきた。陽一は、制服を着て学校に出かけた。陽一は高校一年生で、何事も真剣に考える青年である。

陽一はあわただしく暑い朝、同じ時刻の電車に乗った。ちょっとすると、次の駅でたかしと祥子が乗って来た。この二人とは中学時代からの親友で何をするにもいつもいっしょだった。「おはよう」と声を交わしながら学校へと向かった。

夕方になり、学校の終わった三人は、いつもの喫茶店に行った。すると、「今度の日曜日に、また映画を見

に行かない？」と祥子が言った。二人はこれに同意した。陽一としてはちょっとうれしい気がした。それは祥子のがだんだんと気になりだしていたからだ。陽一は日々過ぎるごとに、祥子への思いが大きくなっていった。

ある日、昼休みにたかしに呼び出された。

「どうしたんだ？」と陽一はたかしのことを心配して聞いた。

「実は俺、祥子のことずっと前から好きだったんだ」

これを聞いた陽一は心にすっぱりと穴が開いたような状態になってしまった。

「それで親友の陽一に一応言っておこうと思って」

「う、うん。頑張ってみろ」

とたかしを励ました。いや励ますより仕方がなかった。

日曜日になり、約束通り映画を見に行った。いつもなら本当は楽しくなるのに、陽一はたかしと祥子のこと気がなくなって、とても楽しいとは言えない。陽一の心には、たかしと親友にもかかわらず成功してほしくないという気持ちの方が大きかった。

夕方になり、ついにたかしは祥子に言った。

「祥子、君のことが好きなんだ。つき合ってほしいんだ」

これを聞いた祥子は突然だったのでびっくりしたような表情をした。祥子は少しとまどっていた。

「うん、わかった」

と答えた。陽一は茫然とした。友情というたった二文字のために……。

それから、前のようにいっしょに映画を見に行くことも、学校に行くこともなくなった。今ではやり場の

ないこの切なさ。何に叫ぼう。友情とは何だったんだろう。

㊦ 東京（やしきたかじん） 友和・H

あなたと出会って早二年。大阪から出てきて、なにもわからないこの東京で、初めて私に声をかけてくれたあなた。あなたも関西弁で、やさしい口調で私をくどいたわね。最初は、とてもやさしい人だと思ったあなた。昔のあなたはどこへ行ったの？ もう、私はあなたとならいつ死んでもいい覚悟なの。

忘れないでね、こんな女がいたことを、何もできなかったこの私を。

私はあなたのためなら何でもしたわ。抱かれろといわれれば抱かれ、一人にしてくれといわれればすぐ出ていったわ。でもあなたは、私に何もしてくれなかったわ。

私の誕生日、あなたと出会って初めての誕生日、いけない私は、いろいろと期待したわ。どんなものをくれるのか？ どこにつれていってもらえるのか。でも、この日は、電話一本で「今日は残業だ。」この一言で私は泣いた。あなたが帰ってくるまで泣こうと思ったのに、あなたは帰ってこなかった。

それから月日は流れたけれど、もう何の会話もないの。「ああ、私はもう死にたい」と一言ぼそっというても、あなたは知らんぷり。

私はあなたに「いっしょに死んで」といった。私は本気だった。でも、あなたは、もう私のことなんてどうでもよかったの？

なぜ、何も答えてくれないの？ 私は何日も一人でやんだわ。だれも相談する人のいないこの東京で、私はこの大都会で生きる支えのあなたを今なくそうとしている。もう私は死ぬしかないのかしら。

東京湾に面している工場跡。一人で歩いてきてしまった。いちおう家に書きおきをして。でも、あなたはた

ぶん来ないでしょうね。

「さようなら、あなたのじゃまにならないよう私は消えます。ありがとう、たのしかったわ、あなたとすごした二年間。」これを机の上にしらじらしくおいてきた。

来てほしい、あなたに来てほしい。心の中に願いながら私は、十二時に死のうと決心した。あと三時間、二時間、一時間、三十分と、時は流れて、死の準備もとのった時、あなたは「まてゝっ」と一言、そして、そして私を抱きしめ、

「もう一度やりなおそう、オレとオマエ、そしてこの東京と」

と、あなたはくさいセリフで私にいった。なぜか涙が止まらない。私が初めて知ったうれし涙は、この東京に教えてもらった。

歌物語④・⑤は、彼らのオーソドックスな作品群の中の二篇である。歌物語⑥・⑦もまたそのバリエーションと言えようが、⑥には恋を成就しえなかった主人公が描かれており、⑦は全作品中で女の語り手を配した唯一のものであった。なお、歌物語④・⑤に登場する心優しく不器用な男主人公は、書き手の現実の姿の投影でもあろうか、彼らの作品の多くに共通するものであった。歌物語⑧は、関西出身の二人に関西弁をしゃべらせてほしいところだが、「しらじらしく」や「くさいセリフ」といった詞章に窺われる、出来事に対する語り手のやや冷めた距離感（あるいは書き手の照れ）が面白い。

#### 四

吾郎は滋賀県にもともと住んでいたが、太一は沖繩から滋賀県に引っ越して来た。二人は高校生で、高校陸上の百メートルの走者であり、一年前のインターハイでは吾郎が優勝、太一が三位であった。

それが二人の運命的な出会いでもあった。

一年前、太一と吾郎はまだ知らない同士で、いろいろな小さな大会でだんだんと顔見知りになり、この日友達になりライバルになった。

ある時、「今回のインターハイはオレがもらう」と太一が言うと、吾郎は「何言ってるんだ。オレが優勝する」と電話で話していたのだった。

インターハイ前日、吾郎の足に異変が起こったが、吾郎は多分緊張して足の筋肉がはっているのだろうと思いい、そのまま寝た。

そしてインターハイの予選は通過できたのだが、決勝で思わぬアクシデントが待ち受けていることを吾郎は知らなかった。

百メートル決勝のピストルが鳴ったと同時に吾郎のふくらはぎのあたりが『ブチッ』と大きな音を立てた。その場に吾郎は倒れていた。太一は一位になったが吾郎は走れなかった。吾郎は、すぐさま病院に運ばれると「右アキレス腱切断」と言われて、全治六ヶ月。もう走ることはできないと医者に宣告されてしまい絶望してしまった。

その翌日、手術が行われ、手術は成功。ベッドで吾郎が目を覚ますと横に太一が座っていた。太一はもう一度百メートルの競走をしようと言ったが吾郎は「もうオレは走ることができない」と言って太一を帰した。

それから何度も太一は吾郎の所を訪ねたが吾郎の答えは同じだった。

ある日、ふっとラジオが聞きたくなり電源を入れた吾郎は、D・Jの、

「滋賀県の絵崎太一さんからのリクエスト、CHAGE&ASKAの『On Your Mark』をお願いします！」

という声に耳を傾けた。音楽が流れ終わると、

「この『On Your Mark』は陸上競技とかの『用意』という意味で使われます」

と、D・Jが言うのを聞き、吾郎は太一の気持ち強く感じた。太一がそこまで思ってくれるならと、「オレは絶対足を治して百メートルのインターハイに出場する」と固く心に誓い、リハビリをくりかえした。

そして次の年、インターハイ百メートル予選を通過して吾郎と太一の二人は決勝に進出した。太一はニコース、吾郎は三コースだ。

「今、百メートル決勝のスタートを告げるピストルが鳴りました……」

### ⑤ 明日への誓い（ポール・マッカートニー） 康介・T

俺の名前は康介・T。ただのサラリーマンだ。

妻の声で目が覚めた。朝がやってきたようだ。カーテンを開けると雲一つない青空が広がっていた。いつものスーツに着がえて食卓へ向かうと、妻と息子が一緒に朝食をとろうと座って待っていた。

「早くしないと会社に遅れるんじゃないの？」

と二人に言われて俺は手早く朝食を済ませて家を出た。家の中から妻の「いってらっしゃい」という声が聞こえた。



今日の俺はいつにも増して機嫌がいい。電車の中で新聞を見ると、その見出しは《史上最高額F市現金強奪事件明日で時効に！》だった。知らないうちに笑みがこぼれていた。その面の隅に親友の顔が写っている。《N井・N林両刑事にも解決は無理？》と出ている。俺は心の中で、「こいつらなんかにあの事件が解けるものか」と嘲笑っていた。なぜなら、今この新聞を読んでいる俺こそが、十数年の間逃げ続けている、この大事件の真犯人そのものだから……。

十数年前、(学生の頃に大した努力もしていなかった俺は)職をなくし、その日食っていくことさえ大変な状態だった。ある日そんな生活に耐えきれなくなった俺は、ある計画を立てた。それがあの現金強奪事件だ。自分の体力と能力を駆使したその計画は、完璧と呼ぶにふさわしかった。結果は大成功。以後俺はその金を少しずつ使い、人並みの裕福な生活を築き上げ、なおも自分は努力し社会で通用する知識とルールを学んで今の会社に入社した。誰も俺を疑う者はいない。事件以来何度も同窓会で出会っているあの二人の刑事、最も身近な妻にさえも……。

「バレるはずがない！」

自分でそう信じてはいるものの、俺の心は罪悪感でおびえ、十数年の間中ずっと震えつづけてきた。だが、そんな生活も今日で最後だ。明日になれば時効は成立し、俺は本当に幸せになれるだろう。全てが許される日。今こうしている間にも、夢にまで見た希望の日々が近づいてくるのが感じられた。

④ 僕のお父さん (桑田佳祐)

紘平・I

ある雪の降る夜、いつも早く帰ってくる父が、珍しく遅く帰って来た。父は、母にカバンと上着を脱いで渡すと、黙って自分の部屋に入っていった。

その時、僕は自分の部屋で桑田佳祐の「僕のお父さん」という曲を聴きながらこの曲を使って小説を書いていた。

母が下から階段を登ってくる音がした。僕の部屋の戸を開け、僕に「お風呂に入りなさい」と言って、また階段を降りていった。

外は、相変わらず夜空を白く染めるくらいの雪が降っていた。そして、ラーメンや、焼きいもの屋台などは、会社帰りの人たちが何かに引きよせられているかの様に、大ぜい集まってくる。この時の屋台が一番いそがしい。

風呂から出ると、父はこたつに入ってビールを飲みながら、テレビを見ていた。テレビの内容は、単身赴任をしている男の人の普段の生活のドキュメントをやっていた。

僕は冷えたジュースを飲みながら、それを見ていた。父は「もし単身赴任することになったら、おまえどうする？」と聞いた。僕は「なってみないと解らない」と答えると、父はそうだよなという顔をして、こたつから出て、風呂に入っていった。

次の朝、外は銀世界が広がっていた。父はいつもどおり会社に行った。僕も真っ白い雪をザクザク踏みながら駅まで行った。

夕方、家に帰ると、もう父が会社から帰って来ていた。

父は僕に「単身赴任することになった」と言った。母は、父が病弱だということを心配していたが、僕は、さほど心配していなかった。会社からは、三年ぐらいいしなないと戻ってこれないと言われた。

それから二日後、父は単身赴任先へ行ってしまった。

父が行ってから約半年がたとうとするある朝、電話のベルがなった。それは、病院からであった。父は、朝

会社へ行く途中、突然道でたおれたらしく、意識不明だそうだ。

僕と母は、急いで病院へ駆け付けたが、父の体はとても冷たかった。病名は蜘蛛膜下出血と診断された。あつという間の出来事だった。僕は悲しくても涙も出なかった。

父がなくなってから父のものを整理していたら、ある本の間に封筒がはさまれてあった。内容は僕と母宛だった。手紙には全ては息子にたくすと書いてあった。その時僕はその意味が解らなかった。

あれから十年、僕は会社に入り、今は父と同じように単身赴任をやっている。

歌物語⑤・⑥・⑦は、彼らの所謂「恋愛もの」以外の作品群中の三篇である。

歌物語⑧は、書き手とほぼ等身大の主人公を登場させ、彼らの学校生活の一部でもあるクラブ活動に材を取ったものである。歌物語⑨は書き手とその友人を实名で虚構世界へ登場させ、⑩はこの歌物語執筆に取り組み現実の時間から虚構世界へと入り込んでいく。前者にはバブル経済崩壊後の中高年者のリストラの問題がちらりと垣間見えるし、後者には単身赴任の問題が（それに対する書き手の思いはいまひとつ不鮮明ではあるものの）取り上げられている。いまさら言うまでもないが、高校生である彼らの内面世界もまた、その意識化の如何にかかわらず、現代の時代情況と決して無縁たりえない——そんなことを改めて感じさせられる。

## 五

これまで何度か述べてきたことではあるが、国語教室でどんなに心惹かれる作品に出逢ったとしても、あるいはその収載誌を明示した場合であっても、所謂「待ち」の姿勢が出来ているせいも、生徒たちがみずから書店や図書

館に足を運んで、その本を手にするということは必ずしも多くない。

国語教室における彼らと作品との出会いが、漫画やテレビドラマとのそれ同様、専ら受信者としての享受を仮に常態とするにせよ、その出会いの意味を対象化し、敷衍ふえんしていく作業は少なくともできるはずだ。そんな作業でも、煉瓦を一つずつ積み上げるように繰り返しているうちに、ひよっとしたら作品との能動的な出会いといった地平にやがて辿り着くことになるかも知れない。今回の〈現代の「歌物語」を書く!〉を、とりあえず私はそう位置づけたいと思うし、このことはまた、生徒たちが受信し享受した所謂「自分の好きな歌」を用いて発信していく作業でもある。……などと書き記しながら、私の知らない歌手や歌の数々を目の当たりにするにつけ（実際、歌詞の提出を求めたのは正解だった）、また彼らが自作の「歌物語」を楽しんでいるさまを思い合わせるにつけ、この駄文が彼らと何かを共有していないオッサンの戯言たわごとと化して見えることを恐れる。

本稿に書きとどめた取り組みもまた、年間の授業計画の中でみれば、ほんの途中経過に過ぎない。というよりもむしろ、私たちの国語教室における（ひいては学校現場における）営み自体、常に途中経過であると見なすべきなのかも知れない。それをルーティンに感じて、お決まりのパターンでこなすようになったとき、私たちは、対外的にはともかく実質的には国語教員として終わってしまうのではないだろうか。確かに「たかが現代文の授業！」ではある。それでもなお、作品をはさんでの生徒たちとのせめぎ合いの中で、彼らの現在あるいは私自身のそれと不断に「会いたい」と私は思うのである。

注

① 『会いたい』という曲を浩一の留守電に吹き込んだのは、真弓だった。しかし、彼女がそうしたのはただの一度だけだと言う。また、浩一のマンションの踊り場で、真弓は制服姿の少女・美知子が自分に「今日は」と挨拶して階段を降りていくのに遭遇したことを告げる。物語は幕切れを迎えるが、それでもなお、次のような二つの謎は、解決を与えられぬまま残ることになる。

○ 結局のところ、二度目以降の『会いたい』の電話の主は誰だったのか。

○ 真弓が踊り場で会った制服姿の少女は誰だったのか。仮にその少女が美知子だとすると、彼女はなぜ浩一ではなく真弓に会いに現れたのか。

このことは、鎌田敏夫『会いたい』をめぐる読解上の問題としてあるが、既に拙稿〔注②〕で取り上げたので、ここでは、あくまでも参考のため、第八時限目に生徒たちに書いてもらった感想の中の一つを掲出するにとどめておく。

《会いたい／将之・B／僕は美知子がなぜ真弓に会いさつをしたのかを考えた。『会いたい』を読んでいると、だんだん謎がとけてきた。一つ目は真弓がポストンから帰ってきて、浩一は一人じゃなくなるから、美知子は真弓に交代、後をよろしくという気持ちをこめてあいさつをしたこと。二つ目に考えられるのは、美知子は制服姿ということと写真と同じ姿や顔で変わりがいいことから幽霊と僕は思う。最後に電話のことについて考えてみると、一度目の電話は真弓だったけれど、後の二回は誰なのかというと、浩一に会いたいと思っている人は真弓以外には、美知子がつきあい始めてあまりたらずに死んでしまつて、ずっと浩一のそばで生きていたいと思っていたから、浩一の電話に会いたいという曲を入れたと僕は思う。》

② 拙稿「鎌田敏夫『会いたい』の授業」〔『同志社国文学』第43号、一九九六年一月〕。

③ 一九九二年度に同じ作業を試みたことがあり、その取り組みについては、拙稿「高一国語（現代文）・『羅生門』の続編を書く」〔『解釈』第39巻第10号、教育出版センター、一九九三年十月〕にまとめた。なお、同稿は『国語フォーラム』第71号（小学館、一九九四年六月）、『芥川龍之介「羅生門」作品論集成』（近代文芸作品論叢書12、大空社、一九九五年十一月）に再録されている。

④ 初発感想（五十文字）の一覧をプリント化して配布すること、彼らの感想文や作品を（その巧拙に関係なく）読み上げること、学級通信や教科通信の紙面に彼らの作品を掲載すること——彼らの作品を国語教室へ還元するこうした作業の際、私はいずれの場合でも、その一つ一つの感想や作品の「面白い点」についてコメントすることになっている。それなりの時間と労力は要するものの、これを繰り返していると、学期が進むにつれて生徒たちの書くことに対する姿勢は少しずつ変わってくる。

付記（読者のみなさんへ）

このたびは、私の授業実践をダウンロードしてお読みいただき、ありがとうございました。

私のホームページ《たまぶりぶり通信》では、「授業実践記録」(<http://www.nextftp.com/tmbb/lessons/>)に次のような授業実践を公開しています。WEB版の閲覧とPDF版のダウンロード、いずれの形でもお読みいただけるようになっていきますので、是非、ご利用ください。今後も少しずつ追加していく予定です。

《たまぶりぶり通信》WEB版・PDF版

- 山田詠美『蟬』の授業
- 現代の歌物語を書く
- 鎌田敏夫『会いたい』を読む
- 清水義範『トンネル』の授業
- 鷺沢萌『ほおずきの花束』の授業

また、「生徒たちの《現実》と切り結ぶために」と題した全六篇のシリーズを《でじたる書房》にて販売しています。この一連の論考は、高校生たちの現実感覚や体験と響き合うような現代作家の作品（五篇）を自主教材として取り上げた授業実践あるいは授業指針について述べたものです。タイトルと扱った作品は次の通り。あわせてお読みいただければ幸いです。

《でじたる書房》PDF版

- 心の《皮むき》のために——山田詠美『賢者の皮むき』の授業——
- 恋人という名の他者——岩川隆『有楽町心中』の授業——
- 選択肢としての《生》——重松清『舞姫通信』の授業——
- 《希望》の在処——村上龍『希望の国のエクソダス』の授業——
- 新たな《現実》に向かって——鷺沢萌『卒業』の授業——